



臨床検査科

独立行政法人 国立病院機構
神戸医療センター
National Hospital Organization Kobe Medical Center

～病理検査室～

神戸医療センターには、あらゆる臨床検査を担当する「臨床検査科」があり、その中にはがん診療に大いに貢献している「病理検査室」があります。ここには、がんの他に種々の病名を診断する「病理医」がいます。病理医は直接患者さん方とお会いすることはありません。採取あるいは切除された臓器・組織に對して「病理診断」を下すことによって、臨床医・主治医を通じて患者さん方の診療に貢献しているわけです。

がん診療に関しては：

- 採取された組織の中に、がんの成分が認められるか否か。がんとすれば、どのような顔つきなのか（「組織型」といいます）（あらゆるがん診療についての基本といえます）。
- がんに対して手術がなされた際、手術診断を行います。すなわち、どのような種類のがんなのか（組織型は何か）、広がりや大きさ・深さはどうか、どの程度の進行か（「病期」の決定）、取り切れているか（「根治度」について判定）等の診断を行います。
- 時に、手術中にも診断を行います。臓器・組織の周囲リンパ節にがんの転移があるかどうか、切除断端部にがんの組織が認められるか否か、等の診断を行います。

実際の病理組織の写真を示します（各々、胃がんの症例です）。

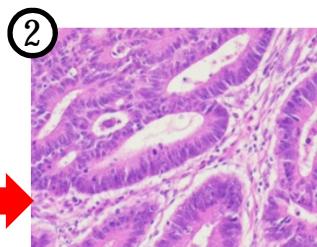
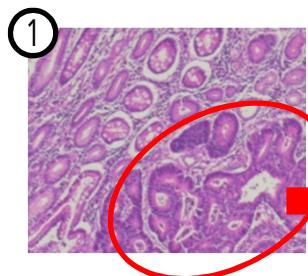
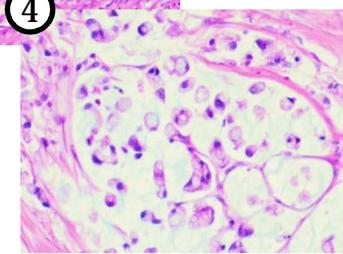
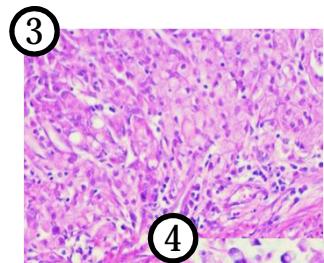


図 の中で右下に見られるのががんの組織です。図 はその拡大像です。腺管を形成していることから、典型的な「腺がん」です。通常の、がんではない腺管に似ていることから、「分化の良い」（あるいは「分化の高い」）腺がんという診断になります。



も胃がんの例ですが、先ほどとは明らかに違う顔つき・組織型となっています。腺管構造を示さない「腺がん」です。先ほどの例とは異なる「分化の悪い」（あるいは「分化の低い」）腺がんです。印環細胞がんと呼ばれる、進行すれば特にタチの悪いがんです。こうしたがんを見落とし・見逃しをすることなく診断することが肝要です。

